教育の視点

白根地区生活指導協同推進実践発表会から

育てよう 目あてに向かって燃える白根の子

県の教育委員会の『生活指導協同推進地域』の指定を受け、「児童・生徒の非行を未然に防ぐための在り方」について、五十五年度から取り組んできた白根第一中学校区の小・中学校七校では研究と実践活動をまとめ、十一月三十日、白根小学校で市内の教師、PTA関係者など四百五十人を集めて、報告会を開きました。

家庭内暴力や校内暴力など青少年の非行が急増し、大きな社会問題となっています。

こうしたことから県の教育委員会では五十三年度から生活指導の協同推進地域を指定し、児童・生徒の非行を未然に防ぐには学校、家庭それに地域全体がどのように取り組めば良いのかを、実際の学校教育の中で研究し、実践する方針を打ち出し、問題解決への方向づけをすることになりました。

本市でも、この推進地域に第一中学校区が指定され、第一中学校をはじめ、茨曽根小、小林小、戸頭小、根岸小、大通小、白根小で五十五年度、五十六年度の二か年にわたって、いろいろな研究と実践活動が続けられてきました。

活動を進めるにあたり七校では共通の研究主題を『児童・生徒が自己の目標達成に立ち向かう中で、充実感を味わいさせ、連帯感を育てる生活指導を求めて――』と決め、さらに具体的に①学校運営の中に生活指導を位置づけ、実践の場の持ち方を工夫する ②児童・生徒の実態は握と生徒への理解に努める ③一人ひとりが生きがいのある学校生活を送れるようにする――の三つの柱の基本方針を定めました。

二年間の成果を全市の学校に広げ継続したい

そして今までの生活指導について各校で再検討するとともに新たに「学校、学級づくりと生活指導」「各教科、領域での生活指導」「問題傾向児の実践指導」を加え、各校で分担しながら研究を進めてきました。

また「家庭と地域との連携のあり方」については市の教頭会が受け持ち、PTAをはじめとした地域の関係機関と検討を繰り返しながら、今後めざす家庭教育、学校体制、PTA事業などは、どうあるべきなのかを探ってきました。

こうした教育現場での努力が一歩一歩ですが確実に実を結びつつあることが、十一月三十日の最終発表会で、それぞれの課題で研究、実践活動を進めてきた各校から報告されました。

全体的な成果としては □PTAの校外補導部が積極的に子供たちの健全育成に努めた □学校と家庭、地域との連携が深まった □生活指導の重要性が再認識された――などが上げられます。しかし、残された課題もまだあります。

白根小の三浦 稔校長は「二年間だけの研究で終わるのではなく、せっかくの成果を全市の学校に広げ、続けていかなければと思っています」と、話しています。

児童・生徒一人ひとりとのかかわりを大切に

幸いに本市では、児童・生徒の大きな非行や、校内暴力などの大きな問題は今のところ起きてはいませんが、近代社会のひずみがいずれは押し寄せてくると考えなければなりませんし、家庭教育機能の低下などから、いつでも起こり得る要因は多くなっているといえます。

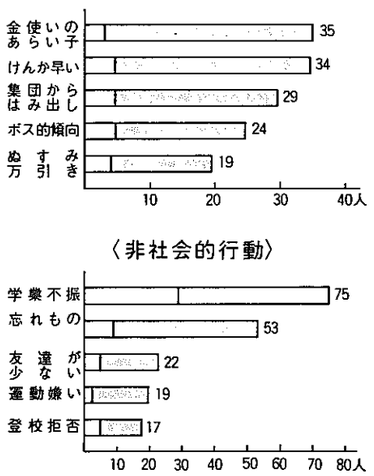
それぞれの問題についての対策だけが生活指導ではなく、むしろ児童・生徒一人ひとりに対しての家庭、教師あるいは地域のかかわり合いを大切にし、日常生活に喜びと張り合いをもたせることが、児童・生徒の非行への道を未然に防ぐことにつながるのではないでしょうか。

こうした『かかわり合いの大切さ』を実際に実践し、教師の努力とクラスメートの温かい愛情で登校拒否の児童を立直らせた例が、問題傾向児の実践指導分科会で報告されました。次にこの報告の一部を紹介し、みなさんからも参考にしていただきたいと思います。

問題傾向児の実態調査

このグラフは、児童一人ひとりをよく見つめ問題点をさぐるために、55年4月に白根小で行った調査結果です。

傾向があり、継続観察指導の必要のあるもの
事実があり、常に指導の必要のあるもの



問題傾向児の実践指導事例

〔A子ちゃんの状態〕

A子ちゃんは、一歳のときにお父さんを亡くし、おばあちゃん中心に育てられた過保護な子供でした。こんなA子ちゃんが登校拒否の傾向を見せ始めたのが三年生に入ってからで、四年生の二月からは完全に登校しなくなりました。

家から一歩も出ず、保護者を通して話が聞けるだけの極度の状態でした。

〈指導の経過〉

■まず、本人に何とかして会い、話をしてみること

●新担任として赴任。事情を聞き、A子ちゃんの母親に四月から登校するよう説得――四月に入っても登校せず。明日から行くという繰り返しでどうしようもないとのこと。

●四年生のときに親しかった女の子に毎日迎えに行ってもらう。担任も何回か訪問――どんなことがあっても顔を出さない。

●せめて声だけでも聞きたいと思い、ときどき電話をする――祖母が出て話をするか受話機をとったまま応答がない。

●訪問も電話もだめ。しかし手紙による連絡を続ける。夕方でもいいから必ず一回学校に来るよう厳しく督促する――母親から連絡あり、全校児童がいなくなったら連れてくるとのこと。

〈夕方、六時ころ母親と一緒に登校。担任の姿を見ると逃げまわる。せっかく来たのだから一度顔を会わせたい。母親と教室に入ったのを見て、担任も教室に入り初めて顔を合わせる。目が落ちつかないが、話をしてみてもあまり普通の女の子と変わりないように思えた〉

●夕方の六時ころでもよいから毎日がんばって来るよう約束。担任が六時過ぎまで教室で待つ日が何日も続く――登校せず、母親からの連絡もなし。

〈毎日、クラスの女の子たちが朝夕に立ち寄る日が続く。しかし顔は出さない。「先生だめでした。おばあちゃんがもう来なくてもいい」と言ったとさびしそう。夏休みも一回も外出せず。ただ一回、実家に墓参りに家族で出かけたとのこと〉

●家庭訪問し、無理に本人の部屋に入らせてもらう――顔を隠して逃げ回るだけ。効果なし。

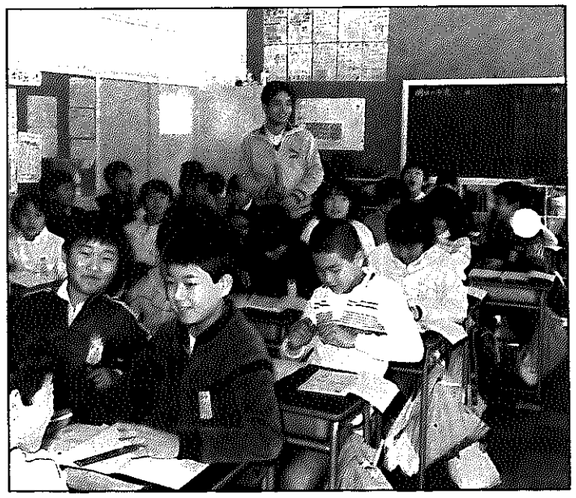
〈学校長と母親と担任で話し合い、相談所に入所させる。しかし、一日泊っただけで家に帰る。このころから母親がやや積極的姿勢を示し始める〉

●正午、必ず本人を学校に連れてくるよう厳しく督促――予定時刻に母親と一緒に来校。

〈昼間、登校したのは初めて。教室へ行ける状態でないので校長室で話し合う。母親は連れて帰りたいと言うが、無理に母親だけ帰す〉

●本人に少し動揺があったが、相談室へ連れて行き、予定していたS子が入ってくる――久しぶりの対面で話しがはずまない。

●社交性のあるY子を連れてくる――Y子を中心に話がはずみその後、数人の女の子が入ってくる。ゲームをしたりしているうちに笑顔も見え、よく話すようになった。



〈午後、教室に入り、席につかせる。クラス全員がそろったのはこの日が初めて〉

●放課後、女の子たちに本人の家で遊んでくれるよう頼む――担任も本人の家に行き、みんなで夕方まで遊ぶ。

〈その後、何日も女の子たちが自主的に本人宅に遊びに行く。新しい友情が芽生えつつある〉

■本人に精神的張り合いをもたせること

●Y子との間に芽生えた友情から交換日記が始まったが、それを賞賛し継続してもらう〈現在も続いている〉。

●家庭ノートに学習の成果を含めて、希望をもたせるアドバイスを書いてやる。

●本人の努力が表面に表われるよう活動や発表の場を配慮する。

■本人の弱点まで担任はおりて共に歩むこと。またそれは厳しさへの移行でもある

●授業中、悪ふざけをした男の子を高く抱きあげ、しりをたたいた。そのあと本人は「私も高く抱きあげて欲しい」と言う。

〈この子は父を知らない。父に抱きあげられた経験がないのだと思うとともに、反面、厳しさも要求しているのではと考えをきりかえた〉

●時々さりげなく抱きあげたり、肩をたたいたり、時には体育の服装などについてきつく注意する。

〈日曜の夕方、本人から「これから先生のところへ遊びに行ってもいいですか」と電話があった。その気持ちは表現しきれない〉

■その他

●五年の終わりころ、友だちを通して来年も担任の先生が変わらないといいなあと言ってくれた。

●参観に来なかった母親も、参観に来るようになった。

●完全に立ち直ったある日、母親が涙して担任のところに来てお礼を言われた。「お礼を言うのは私ではなく『暖かい心』という学級のめあてをやりとげた女の子たちに言ってほしい」と答えた。時間的なロスは多かったが、根気よくやりとげた女の子たちの連帯感の強さに頭が下がる思いだ。